

---

# 言霊スカイライン（仮んこ）

三葉酸

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

言霊スカイライン（仮んこ）

### 【Nコード】

N1001BA

### 【作者名】

三葉酸

### 【あらすじ】

Q：ただの凡人、いくらでもいるNPC、観衆の中の覚えられない一人、イレギュラー、平和馬鹿。僕、新月真白は普通の中学生にして語り部に選ばれました。平凡真人間が売りだというのに、突然魔法のうんたらが覚醒うんたらとか言われたり、大統領さんが「冷やし中華はじめました」的なノリで魔法課程を単位に決めたり、傲慢な従者を連れた家政婦がやって来たり、果てには高校生でもない僕に『魔導郵便局』から就職内定が届いたりするから驚愕の連続。こつというのは異世界トリップとかのお約束じゃないの？ え、違う

の？ 主人公は隣の美少女さんでよくな？ つかそうさせるマジで。

A：はい、喜び慎んで却下させていただきます。 長編・筆を

捨てた中学生が、夢も希望も魔法で誤魔化しちゃう現代日本に物申しながら化物のつま先を踏んづけるお話です。設定上、首都がまた京都に戻っています。決して強奪された訳ではないのであしからず。

開始：「ふざけるな」

僕はごく普通の中学生だ。

当然、僕のまわりも普通でなくてはならない。

家族の誰かが魔女とか宇宙人とか超能力者とか伝説の英雄とか実は死んでいたりとか、あるいは町中、学校、世界を僕と同じように歩く人間が、サイボーグとか吸血鬼とかに化けているとか、そんなすごいなにかは存在しない。

科学でなにかを証明できる時代に生きてきたからこそ、僕は言う。

魔法だのSFだの、僕はこれっぽちも信じない。

ないことをあることになんてできない。誰かの妄想が本当になつたりなんてしない。夢を見るだけ無駄なんだ。それを期待するだけ、悲しくなるだけだ。

なにもとりえや見込みがないやつに、あえて名指しするならこの僕に、ぞくに言う神様が才能を与えるのはありえない。

だってどこかの超有名私立学園に通っていないし、不思議な伝説がある地方都市でもないし、大都会はもちろんのこと、すごい田舎町へ引越す予定もない。もしかすると、そんな感じの話にめぐりあうかもしれない設定なんてもつてのほか。

だから、僕にはヒーローを背負う資格がない。

それはそれで退屈だとは思わない。むしろ、望んでいない使命を押しつけられる人生はごめんだ。僕は世界を助けたいとか、平和を守りたいとか、見返りのない役目をなにより嫌う。僕はなにかをなしとげる際、なにかを貰わないのは耐えられない。

人間、なにかを交換条件としないとなにもやらないんだよ。偽善者なんてどこにもいないんだよ。むくわれないものを本気でやるわけないじゃないか。

そもそも、そんな大きい規模を救う力は当たり前のようにないわ

けだし、生まれて十四年の子供に自分達の命運を託す漫画の中の大人というのはどうしたものか。あんたらそれでいいのかよ、子供がしくじったら全部ペアだぞ。

現実的に考えてみれば、僕のいる世界はいたって健康体だ。というのは、怪獣が襲ってきたとか、大きい災害があったとか、今のところ大事件は未発生。小さな異常はあるのだろう。でも、世界は何人かの勇気が必要としないのは確かである。

つまり、僕一人がもし、とんでもないハンドパワーを手に入れたって、世界は動かないのだ。

才能は、その力が活躍するところでないと、輝けない。

全ては平常運転だ。

だったら、僕に才能があるうがなかるうがなにも変わらない。

言ってしまうえば、普通に暮らしたい。このまま受験勉強、卒業、高校生活、大学、就職と、誰もがそうしてきた人生のレールを歩いていた。避けられない面倒くささではあるけれど、僕としてはそれなりに恵まれた幸せだと信じている。それが凡人がやるべき枷でもあるし、命のありがたみを適度に知って極楽浄土へGOする時に一番未練が残らない生き方でもある。

個性のない町で、ごく普通の中学校に通い、一家団らんを過ごす中学三年生　それが僕、新月真白。ちょっとひねくれてるだけの普通の中学生。それ以外の何者でもない。それ以外の何者にはなれない、ただの無力な子供。

それがいい。

それでいい。

それを。

「ただいまをもちまして、世界の全てが『魔導』に目覚めました。ファンタジーが現実世界に踊り出た瞬間です。世界は旧文明を思い出したのです。全ての民、魔導に幸あれ、アーメン」

それを。

今まで保たれてきて、これからもそうなっていくと信じたのである

う、かけがえのない日常を。

十年前。

どこかの国の大統領サマサマがためらいもなく、全て粉々に砕きまくる。魔導？ なんじゃそりゃ、妄想でいう魔法ってこと？ どういうことですか、答えて下さい総理！ 教えて総理先生 だけどただの記者会見で机上の空論をぶちかました大先生は無言を保つ。袋叩きを繰り返すマスゴミの山、楽しい楽しい論争のファンタジー。なるほど、これが魔導ですか！ ふとニュースキャスターが笑う。テレビに映ったキャスターが空を飛ぶ。

非科学的で魑魅魍魎な摩訶不思議スパイラルのはじまり。

これが不可抗力というものだとしたら、僕はそう決めた全ての人類にこう告げようと思う。

「ふざけるな」

四月五日 始業式(1)

春休みから目を覚ました中学生、僕、新月真白は、いつもより早く起きる。

あくびをかみ殺し、ツインの白いソファから体を起こして目覚まし時計をのぞき見ると、針は六時四十分をさしていた。もう一眠りといこうとしたが、いつも叩き起こしてくれるアラームが鳴る前に起きてしまったせいか、とても奇妙な感じがして眠気が一気に吹き飛んでしまう。

仕方ないのでソファから降り、寝巻き姿のまま部屋を出て、下に降りていく。春なのに未だに冷えた廊下に、自分の羊のスリッパのぺたんぺたん、情けない音がすごい響いた。まるで餅つきの音そのものだと思った。

「お姉ちゃん、おはよ」案の定、リビングに入ると、そこには同じようにパジャマ着で朝食をほおぼる妹、新月真冬がいた。「珍しいね。ソファから落ちずに起きるなんて」

「てめえ、たまには早起きした姉を褒めてやれよ」

「ベッドの触感が不愉快だからって、ソファで寝てる姉ちゃんだからこそ言えることよ、これ」

辛辣に返す妹の横に座る。テーブルの上には白米、昨晚のなめこの味噌汁とハンバーグ、謎の丸い墨、謎の四角い墨、謎の三角形の墨がきちんと人数分顔を覗かせていた。

「ははっ。こりゃあ真心こもってんなあ」

墨の黒々とした色に吹き出す僕。いかにも我らが新月家の長男、新月水面。「日本男子たるもの」と意気込んで、キッチンに食っかかる姿が容易に想像出来る。

いただきます、と一人合掌を終わらせると、早速箸で墨をつまみ、口に放り入れた。

銀河が見えた。

「今日からお父さん達、また海外で長期出張だつてさ。社会人の皆様は大変ね」

なんの躊躇いもなく墨を食べる真冬の言葉に、ふいに箸が止まる。二人っきりの朝食には慣れていた。父母は会社の使い走りに付き合わされており、しょっちゅう家を空ける。兄は社会人なので当然いつもいないし、家事全般は家政婦を雇っている（長期出張するたびに人が変わる）。しかも最低限の挨拶をするだけで、家政婦はさつさと仕事を済ませて帰ってしまうのだ。それを考えても、家では二人つきりが多く、結果として朝も二人だけである。

海外で、長期出張。

「それじゃあ、また新しい家政婦来るのか？」

「らしいね。お兄ちゃんが帰ってきたら、詳しい話聞けると思うけど」

妹は箸を置くと立ち上がり、カーペットに転がっていたリモコンを拾って電源スイッチを押した。ばち、と火花が散ったような音と共に世間様の情報が流れ始める。てっきりニュース番組が物騒な話をしているのかと思ったら、たまたま星座占いをしていたようで、女性のアナウンサーがとびっきりの営業スマイルで結果を喋った。

『今日一番運勢が悪いのは、いて座のあなた！ あなたの家族や恋人にとんでもない災難が訪れることでしょう。キーワードは「黒い影」、キースペースは「屋上」、キーアイテムは「飛行機」！ それでは皆さん！ いい加減占いなんてものから卒業しましょ』

問答無用でテレビの電源を消す、いて座の妹、新月真冬。これは絵になると思うに一票。

しっかしまあ、さっきのアナウンサーさん。なかなか妹に酷なことを言ってくれるではないか。

と思つたら、大変なジト目で、妹はこっちを振り向いてボソリと呟いてきた。

「ですつてよ、災難警報絶好調発令中の新月真白お姉様」

「勘弁して下さい、新月真冬さん」



いて座の人より、周りが痛い目に遭う占いってどうなんだ。

まあ、元より僕も真冬も、占いなんてこれっぽちも信じてないんだけどさ。

「お姉ちゃん、早く食べちゃって」真冬シェフが作ったハンバーグをほおぼっている、いつの間にか白いエプロンを着込んだ本人が、食器をまとめはじめていた。「わたしが皿洗うから」

「ああ。あいかわらずおいしかった」

残ったハンバーグを急いで口に入れ、食器を真冬に差し出す。合掌してごちそうさまと言い、ちょうど着替える時間を示す壁の時計を見上げてから、再び自室へ戻った。

\*

本日は曇りの切れ間から晴れ。まだ残る寒さに身を震わせ、ろくに車を通らない路地を進む。

僕と真冬が通う学校、叶総合中等学校は、中学校なのに制服がない。それに比例するかのよう、校則は厳しくなく、勉強や部活の成績も特別優れていない。不良はいるけど、各自青春らしくのびのびと過ごす平凡な中学校、それがこの学び舎のステータスであったりもする。

制服がないのは当然楽っちゃ楽だが、かといって私服を着ていくと、自分のセンスが露骨に出してしまうので、制服っぽいもので普段通っている。

いつも着ているのは、胸にあしらった大きいボタンと、マントのようなぶかぶかとした黒いセーラーカラーが印象的な上着に、白いセーラー服。反対に黒いミニスカートと白いタイツ。いわゆる白タイプ。ついでに言えば妹は僕と色違いの黒タイプを着ている。

ちなみに京都府でセーラー服着ている学校って、以外とありそうでないんだってさ。ていうか、この上着とセーラー服は、母親の母校である、京都に数少ないセーラー服派の私立高校からわざわざ母

自身が取り寄せてきた制服だ。「これ着ないと学費払ってやんね」と半ば脅されて着ている位、相当有名なものらしい。

ま、センスさらすよりかは制服派らしい格好と言えば格好だけだな。冬は結構あったかいし。

「よお、真白」

なんて思いながら、木造建築の田舎道を歩いていたら、ふと後ろから僕を呼び止める声が聞こえた。

それが馴染みのある声だったので、黙って振り返ると、茶髪のシヨートカットに、前髪をゴムでまとめたパイナップルのような額を除いて、白いラインが通った水色のジャージ、紺の体操着ズボンという、熱血スポーツマンの服装そのものに身を包んだ友人、辻井湊がいた。

ツリ目の気迫さが不良らしいオーラを放っているが、僕みたいな凡人と普通に会話出来る程血も涙もない不良ではない。

そんな辻井がニヤニヤとチエシヤ猫のような笑みを浮かべながら、こちらに近づいてきた。

正直、不良という身分の方が流行遅れな気がするけど、あえて言わない。田舎だから許されているケースだ。

辻井はパイナップル頭の髪をかき上げ、退屈そうに呟く。

「あーあ、それにしたって始業式なんてだりいもんやるんだよ。サボりてえなあ」

「耐える辻井。流石にしょっぱなから飛ばすのはよろしくない。夢だと思つて耐えるんだ。夢がどうして出るのかは解明されていないけど、今のところ脳ミソがなにかを実験している説が有力だからそれに一票入れてやれ」

「うわっおー、地球に隕石がぶつかった夢とか、怪獣に襲われる夢とか、脳ミソさん想像力ありすぎ。ここまで来るともう、ただの妄想力にしか見えねえわ」

といったどうでもいい話をしている内に、叶総合中学校……木造の校舎が見えてきた。ここいらから、学ラン、タキシード、ダンボ

ールをかぶったセーラー服、着ぐるみ等、多種多様な生徒が増えてくる。制服がないのをタネに、皆さん派手な格好がお好きなようです。

それらを全面的に肯定しながら校門をくぐり、レトロな雰囲気が漂う敷地を歩いて、校舎に入っていく。

今から十年前位、少子化が進んだこの田舎町は、そこいらの中学校をひとまとめにしたそうで、合併される前の校舎が築三十年もしたので、創立よりも年季が入った校内はちよっぴり一昔前っぽく、レトロっぽい空気で満ちている。

昭和初期の校舎って、きつとこんな感じなんだろうなあ。

「おい真白」ローファーを古びた下駄箱に押し込んだところで、辻井がセーラー服のすそを引っ張った。「クラス替えの紙貰おうぜ。どうせまた同じクラスだろうけど」

「うんにゃ、了解」  
そう。

僕と辻井は、偶然とも運命とも腐れ縁とも思ってしまう程、なにかと行事やクラスで一緒になる。運命共同体にさせて下さいと神様に頼んでもいないのに、こちらとしてはありがた迷惑である。

いつもは無関心なツキがこういうところでは……詐欺だ。

というわけで。

ツキの上がりようは、新学期、進級してからもバツチリ受け継がれていた。

一組に、僕達二人の名前が、石碑のように強く刻まれている。

「……辻井よ、お前の志望校はどこかね」

「未定だよ馬鹿たれ。そこまでシンクウするつもりはねえ」

三年生の生徒数が二百人切り始めたらしく、そろそろ合体した叶中にも限界が見えてきた。近隣の中学校を犠牲にしてまで出来たこの学校が無くなったら、後々の子供達はどこに通うようになるのだ

ろう。別に今年で卒業しちゃうから、僕の知った口ではないよね。責任を学校に押しつけて、僕はその思考を捨てる。

全面木造の校舎は大変老朽化が激しく、たまに強く踏みつけると陥没する。物騒な廊下で話すより、教室などでしゃべくつてた方が一応安全ということ、基本、教室の外は静かである。たまに辻井やその同志（不良）が、こぞつて地盤沈下のお手伝いをしているが、『個性的な』教師にこつてり絞られるので、自らやろうとする人間は滅多にいない。

行儀やよいのではなく、恐れているだけなのだ。

「ま、田舎だから許されることだけだ」

「は？　なんか言ったか？」

「戯言、たわ言、絵空事。単なる言葉遊びだよ」

僕達は教室に入った。

途端、新三年生一学級、クラス皆様のお喋りが途絶える。大きかった声はひそひそと、廊下以上に静まりかえり、なるべく僕達を見ないように様々な方向へ視線をそらした。辻井効果、恐るべし。不良といると、本当にろくなことがない。

そんな中、清楚な黒いセーラー服に綺麗な黒い長髪をたずさえ、黒縁眼鏡をかけた生徒が歩み寄ってくる。礼儀正しくお堅い委員長長タイプの、ここらでは珍しい美人さんは、僕達に近づくや否や深々と頭を下げてきた。

「おはよう、新月真白さん。辻井湊さん。今日からまた同じクラスメイトだけど、どうかよろしくね」

「……ども」「ちーっす」

凜々しい、鈴のような声で不良と劣等生に挨拶を交わす美人さん。クールな雰囲気似合わず、オープンな心かげであるが、顔がとも無表情で怖い。ロボットと喋っているみたいだ。

と、僕が物不思議に美人さんを見つめていると、いかにもそいつが誰だったか忘れた顔をしていたらしく、彼女はあくまでポーカーフェイスを保ったまま、僕に改めて自己紹介を下さった。

「月読暦よ。一年の時以来だったかしら。いつ見ても似合っているわ、そのセーラー服」

つくよみ、こよみ。

「ああ、なんか、そんな名前があったような、なかったような」

「無理に覚えなくていいわよ。これから嫌って位、顔を見るクラスメイトなんだから」

まるで僕を嫌っているかのように言われた。

ちよつと酷かった。

それから軽い挨拶をした後、僕達は出席番号順に席につくと、ちよつど時間がよかつたようで、チャイムが鳴った。古くてがたついた机に頬杖をついていれば、前のドアから「れれれのれんこんぶれつくす」と意味深な歌を歌いながら教師が入ってくる。

草食系男子のようなひよろい黒髪にインテリ眼鏡、きつちりとした黒いスーツ上下の若い教師、数学科の瀬戸稔は、教壇に立つと、飄々とした口調で手を振った。

「やつほー、みなさん、ぐっもーにんぐ。俺みたいなモヤシ教師の下で、最後の一年間を過ごすことになってしまったお前達の命運は俺が預かりました。死なない程度に付き合おうから、安心して暴れていいぞー」

あえて皆さんではなく、みなさんと言う瀬戸教師。そして教師らしくない口ぶりで接するのも、やはり瀬戸教師本人であることを証明している。

この瀬戸稔という教師は、自由気ままにいる分には楽しいが、不良と遊んでいたりと、赤点取った生徒にとことん補習やらせたりと、公務員としてはずいぶん破綻したやつだ。どんな時でも、笑顔でへらへらしているのを見ると、さっきの月読暦みたいな不気味さを感じる。『個性的な』教師陣の中でも、特に危険とされている人物の一人だつたりもする。

こいつと一年間。

しかも我らが不良、辻井湊がいる中で。

これはこれで絶句ものだが、本当に死人が出ないことだけを祈るう。ラブアンドピースだよ、辻井。

「それじゃあ、いっちょホームルーム行くぞー」  
当の本人は自由気まま、いつも通りに名簿を開いた。

\*

辻井はやっぱり飛ばしまくった。こじんまりとした体育館で、校長の世間話を聞かず、一人ふらつと退場した。新一年生がいない中、堂々とサボリに行った辻井は、この学校の勇者に見えた。誰もが出て行きたい一心だったので、少なからず英雄と呼んでもそうそう間違っではないだろう。

お経を聞いているかのように、いつまでもどうでもいいことを喋る校長が口を閉じたのは、それから小一時間後で、軽い時間割の話を教頭が話してから、あっさりとは始業式にお開きとなった。校長が話さなかったら、多分十分も満たずに終わってたんじゃないかな。

教室に戻ってみれば、辻井はもう帰ったらしく、カバンが無かった。自由すぎるやつだった。

別に、僕と辻井は友人なんて関係ではない。たまたま意見や話が一致しているから、一緒にいるだけだ。心の底から楽しもうとは思ってない。二人でどこかへ遊びに行くことなんてもってのほか。ただ話をする関係、ただ一緒にいる関係。一人でさっさと帰ったことを気に留めたりはしない。

友情？ 要は信用出来るか出来ないかの問題だろう。誰もが相手を利用するのに、親近感なんてわく筈がないんだ。「わたし達はずっと大親友」とか言っつてさ、むずかしくてたまらない。

だから、気にしないのは当然のこと。吐き捨てるように、そう思っってみた。

それから委員会や学級委員を決め、帰り学活をして、昼から新一年生の入学式が控えているということで、下校。ほぼなにもしな

った午前中だった。

これからどうしよう。家に帰る前に、一人になれる場所で気分転換したい。

なんとなく、暇をもてあましたかった。

「暇潰しは羊さんの得意分野、なんちって」

気まぐれな僕が決めた場所は、この学校唯一のコンクリートで出来た職員棟の屋上。

塗装がはげた地面や、代々の不良達が残していった落書きがいっぱいは無法地帯。サボると言えばこの場所だしいつも鍵がかかってないので、よくここに来ると何人かいることが多いのだが、珍しく誰もいない。

金網で囲われた広い屋上は、やっと太陽が顔をのぞかせて光が差し込んでおり、春らしい陽だまりでセーラー服がぼかぼかとあたたかくなった。

「よし」

なにがよしかは別として、僕はこの屋上のベストポジションである、給水塔へと続くはしごをのぼり始めた。アスファルトの地面が遠ざかっていくのを見て、少しだけ、田舎の田園風景を独占出来る優越感に浸る。

が。

ぐらり。

「へ？」

ふいに襟を引っ張られる感覚。予想以上に強く引っ張られ、首に締めつけられるような痛みが襲う。とつさに後ろを見ようとして、思わずはしごから手放してしまった。重力がかかり、僕の体は一瞬の浮遊感と共に、地面へ叩きつけられた。

「つつあ……！」

幸い、地面からそんなに離れてなかったので、意識だけは無事だった。ただし痛い。背中が焼けるように痛い。容赦ない仕打ちに、しばらくは息すら出来なかった程。もし頭から落ちたと思うと、こ

んなことぶちかましてきた犯人さんを闇討ちしたくなるもんだ。

なんとかして身を起こすと、遠くで走るような足音が聞こえた。

慌てて視線を追っていけば、足音と思われる主は金網を越え、逆光でシルエツトは見えないが、黒い影のようにゆらめいているのがわかる。

誰かいる？ いや、誰もいなかった。この屋上に隠れる場所は、給水塔だけだ。ドアから隠れて襲うとしても、ドアの隣にはしごがあるのですぐ気づいてしまう。裏へ隠れるに当たって、今みたいに足音でわかってしまう。風は出ていない。どう考えたって、なにも気づかれずに襟を引っ張るのは不可能だ。

そもそも、なんで僕を地面に落とす意図がわからない。何気ないイタズラで処理しても、それならどうして金網の外に 金網？

金網の外＝一歩出れば空中。

つまり、

自殺？

「あ、あの、その人」黒い影に向かって走りながら僕は叫ぶ。「生きていれば、いいことあると思います」

黒い影は僕を見やる。向こうはなにも答えない。

別に無視してもよかったのだが、一番困るのは学校だと思っし、なにしろ第一発見者になりたくないから、そんな馬鹿なことをやめさせて、お悩み相談室へぶちこめばハッピーエンドになる。向こうだって、学校で自殺するのは、きつと止めてもらいたいからだろうし。うん、ナイスな計画だよ僕。

「落ちるんだったら、もつと東京タワーとかスカイツリーとか、最高に楽しそうな所から落ちた方が楽しいだろう？ 学校に未練があるんだったら、せめて夜中に死んでくれ」

「……………」

ちくしょう、自殺志願者の心に僕の言葉なんて届かないってか。

「いやいやいや、ハッターはやめろ。本当に死んだらマスコミ来ちゃっ」



無事金網まで一メートルに近づく。相手が「近づいたら死ぬから」とか脅さなかったたのでなんとか行けたが、問題は、目の前に現れた影のことだった。てつきり逆光で見えないだけだと思ったが、それ以上に奇妙キテレツな光景が広がっていた。

慰めのお言葉をかける以前の問題。

「な」最近びつくりした出来事を聞かれたら、間違いなくこれにする。「なにがどうなって」

自殺志願者は、本当に真っ黒だった。輪郭、髪、服、足、靴……人間の形をしたなにかは、全て墨汁をかぶって、否、それ以上に黒々としていたのだ。どこにも黒以外の色が無い、文字通り『黒い影』。陽炎のように境界線がゆらめき、はつきり見ないとすぐに消えてしまいそうな、曖昧なシルエットがそこに立っている。

これは、夢か？

開いた口が塞がらない。足がとても重く感じる。

こいつは一体何者なんだろう。

力づくで一歩、踏み出そうとした瞬間、黒い影の頭とおぼしき部分分が左右に動いた。

来てはいけない。まるで僕を守るかのように、しっかりと頭を振っている気がした。

「

「え？ 今なんて、」

なにかを呟いている声を拾ったが、あまりに細々としていてわからなかった。

その途端、その刹那。

僕が次に瞬きをした時には、すでに黒い影は、跡形もなく、そこに立っていた痕跡を残さず、消えてしまっていた。何事もなかったかのように、金網が吹き始めの風でいきいきときしんだ。

確かに目の前に誰かがいた。僕の目の前に現れた。

そして目の前で、消えた。

「幽霊は真夜中丑の刻に出るんじゃないのよ……」

急にむなしくなってきた風にしんみりとした気持ちで、僕は一人、そう呟いてみた。

当たり前だけど、そんな独り言に答える風はどこにも吹かなかった。

という昼を、僕はなんとなく体験したのである。

\*

「姉は、憑き物が取れたような顔をして帰ってきた」家に帰ると、狭い玄関に珍しく妹が立っていた。「みたいな描写してもらいたい顔してるよ。どうしたの、そんな呆けちゃって」

狐に化かされたとか？ 中学二年生らしからぬ意地悪げな笑いを、真冬は浮かべる。

久しぶりにその顔を見て、僕はうんざりしながらため息をついた。「ほらほら、なにかあったんでしよう？ 物語でいうフラグが立った顔をしているわ」

「この夢話を聞いて、まだお前は作家なんて馬鹿な職業を目指すつもりだよ」

早速屋上での夢を話すと、妹は興味<sup>てんきゅう</sup>が失せたのか、「なあんだ、ただの幻覚<sup>まげん</sup>かあ。やっぱりフラグは自分で探すべきね……」姉の僕でさえ、妹の中身<sup>うちみ</sup>があまりにも妄想<sup>まそう</sup>すぎて壊せなかった。

成績がそこそこいいくせにちよっと美人らしい顔、大人びた雰囲気<sup>けいき</sup>で定評の、普通より少し上ランクの真冬は、毎日マニアックな物語を読み漁ってはパソコンで小説を書く趣味がある。マニアックというより、とにかく目の前<sup>まへ</sup>にある物語は片っ端から読みたくなる病<sup>びょう</sup>とさえばいいのかもしれない。

逆に僕が好む辞書や資料はとことん読まない。全て自分の思うがままに物語を紡ぐ。これはこれで一種の才能だが、物語としても、小説としても、出版社に出せるようなものじゃない。天才中学生作家と呼ばれたらしいが、この小娘はもうちよっと現実を見た方が

いいと思う。

現実を知っているように見えて、妙にロマンチストな人間が僕の妹なのだ。

「お姉ちゃんは逆に現実見すぎなのよ。少しは明るい夢を　あ」  
冷たい顔で明るいことを言おうとしたらしい、真冬の足が止まる。不思議に思い、リビングのドアを先に開けると、ソファに一人の女性が座っていた。

「紹介するわ、お姉ちゃん」真冬は女性を指差して言った。「新しい家政婦さんで、志染椎名さん」

「志染椎名です。美雪さんとは高校時代の友人でした」  
立ち上がって母の名を口にし、志染椎名さんはぺこりとお辞儀する。

それから背筋を伸ばした姿は、小麦色の髪を三つ編みにし、少し太い眉に整った白い顔、琥珀の色をした瞳にバツチリ似合う赤い頭巾、雲のようなワンピースのかわいらしい外人女性。天使とたとえられそうな微笑みで。

……ちよつと待った待った。

「え、あんた、日本人ですよね」

「もちろん、日本人ですよ？　京都生まれの京都市育ち、和をたしなむ大和撫子。まにゅー」

「あつ、親が外国人とか！」

「まにゅまにゅ、外人さんの血は流れてないんですよ。ま、この見た目なゆえに、よく清水寺辺りで外人さんにナンパされたのですけどね」

ちなみに、学生時代の英語のテストは万年赤点でした、すごいでしょう。と、余計な自慢をされる。

その格好で英語喋れないって、あんたどれだけの外国人の目を騙してきたんだ。日本人含め。

しかもさあ、しかもさあ、なんなのその格好。赤頭巾ちゃんってやつですか、それ。人のセンスをとやかく言うつもりはないけど、

一応母の友人なんでしょう？ 年齢的にコスプレはなしだと思いませんが……。

「まにゆ」志染さんが絶句する僕らに対し、失礼なことに人差し指を向けた。「夜ご飯はなにがいい？」

「……………」

この人、さつきから「まにゆ」ばつか言っているような気がしないでもないけど、とりあえず話し合った結果、今夜は「オムライス」で決定。年齢不明の謎の使用人を追っ払うべく、志染さんをスーパ―へ走らせることにする。

「あの人、本当に家政婦だったりしちゃうのか？ ただのマイペー  
スなコスプレ大好きおばさんだろうが」

呑気に鼻歌を歌う志染さんには聞こえないよう、静かに耳打ちをする。

「さつきお兄ちゃんから電話があつてね、『年聞いて殴られた位美人だった』。本人で多分、間違いない」

兄を動揺へ追い込んだ鬼じゃねえかよ。

その鬼はといえば、バスケットに布をかぶせた、ますます童話の赤頭巾に近づいた買い物袋を手に提げると、マイナスイオンのような天然オーラをかもし出しながら「行つてきます」と礼をした。

の、前にピタリと止まる志染さん。

「もう少ししたら、くるおさん達が来るかもしれませんが、お構いなく」

そう言い残して退散なさってしまう。

うん、まあ、えー、えつと、その、なんだ、つまり……………くるおさんって、どちらさんですか？

離婚届の濃厚な家政夫婦のドラマだけは勘弁しろ。

「ふう」

三人から二人に減ったりビングに、台風が過ぎ去った後のような静寂が戻ってきたと思えば、「とんでもない家政婦さんが私達の家  
に！ 今度こそフラグが立つかもね、お姉ちゃん！」と、妹が何故

かテンションを上げ始めたのでした。

しかし、台風の目が遠くへ行ってしまったこともあり、たった数分の出来事で僕はすごい疲労感を覚えた。

どさりと床に膝をつき、「外より疲れそうな気がするよ、全く」とため息をこぼしたら、ピンポンと響きのよい客の訪問を告げるチャイムが鳴るではないか。それも『ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポピンポピンポピンポピンポピンポ』なんていう、ピンポンダッシュしたくてたまらない悪戯ガキンちよのような呼び出し方である。

ルールは破る為とはいえ、限度というものがあるだろうが。安眠妨害だー（寝てないけど）。

「お姉ちゃん出てよ」

「いやだよ、お前が行けよ」

「私がお姉ちゃんを迎えてあげたんだから、今度はお姉ちゃんが出ないと平等じゃないでしょ」

自分が相手と同じフェアじゃないと気に食わない所は、僕も真冬も一緒なのだろう。全く親のどこに似たんだか。

「うぜえ……ったく」

渋々ドアノブをひねると、目の前には人っ子一人もいなかった。

代わりにといつちやなんだけど、ちょうど僕の腰辺りの大きさを持つ真っ白な小人がいた。

「ほう、貴様が我が主の主か」

小人、いや、餅人形にしておこう。頭上から黒い毛らしき五本のラインと線みたいない黒い目、大きい頭に不釣り合いな胴体、細い棒のような手足をしたそいつが、無駄にカツコイイことを喋った。

棒人間に＋したような餅人形が、喋ったのだ。

ここで純粹に「おう、そうだぜ俺様がお前の主の主だぜひっはー！」と名乗れる度胸を持った人間など、どこにもいない。等。

「我はくるお」餅人形が偉そうに言う。「精霊である『マスコット』の中で優れた量産型雑魚兵の長だ」

「……………」  
「なんじゃそりゃ。」

言葉も出ない僕に対し、餅人形はニコニコ顔にも関わらず、疑り深い声で怪しむ。

「貴様、そんなことも知らぬのか？ 常識的にありえないな」

「ぬいぐるみが喋ることも常識的にありえねえよ。新種は動物園か研究所に帰れ」

「我はぬいぐるみではないぞ、マスコットだ。もっちもちのもち肌でかわいいくるおちゃんだ」

堅苦しい口調でかわいいこぶるんじゃねえ。僕がそう言おうとした時、真冬がやって来た。

「お姉ちゃん、誰と話して　っ!?!」

自分の姉が餅人形と話をしている光景に固まる妹。当然だ、僕だって逆の立場でもそうするさ。

「……………かわいい」  
「へ?」

真冬はワナワナと震えながら、そつと餅人形を持ち上げると同時に頬ずりをし始めた。呪文のように「かわいい」を連呼しながら餅人形に抱きつく妹という光景に固まる姉、つまりは僕が逆の立場だったら、多分あちらさんは気持ち悪いと思っただろう。少し身を引いただけありがたく思え。

ではなく、ではなく!

「やわらかーい、ぷにぷにしてるーなにこれー」

「あー、うん？ 真冬さん？ かわいいと叫ばれている所悪いんだけど、ちよっとその」

「にぷーはぷー、でへへー、これはこれでまた心地よいのー」

餅人形も餅人形で餅人形らしく癒されているらしい。強めのハグが気持ちいいってあんだ。

「で、お姉ちゃん」屈託のない笑顔で問われる。「これなに」

「……………ううん、なんだろうね。お姉ちゃんにはさっぱりわからない

ぜ」

「これなにつて、言われましても、ねえ……僕も知りたいぜ、こいつ何様、じゃない何者と。」

「渋る僕に餅人形が言う。」

「我はくるおだ。頭にくるくるがついているからくるおだ。安直なニツクネームが売りだ」

「ほら、と言われ、実際数少ない毛の中から異常にひん曲がつて生えてきたと思える一本巻き毛を見て、妙に納得。こいつの名前くるおじゃん。頭に巻き毛ついているからくるおじゃん。安直すぎて泣けてきませんか。」

「くるおつて言うんだ。本当に単純な名前だねー」

ん、くるお？

「ということは、だ。お前がその、志染椎名さんの……」

「ここぞとばかりに胸を張り、餅人形もといくるおは、僕達にドヤ顔を押しつけた。」

「やっとわかったか、愚か者め。やはり雑魚は正義に勝つに限る」  
夫じゃなかったのかよ。てかなんだよ、雑魚は正義に勝つに限るつて。雑魚は雑魚らしく引っ込んでっけてセリフがあるの知ってる？ サンマじゃないんだよ。タイミング間違えてるよ。あ、雑魚だから？

とまあ、とまあ。くるおのツツコミに完全に勤しんでいた僕は、ある妹の言葉でハツとなった。

「お姉ちゃん、時間大丈夫？ 今日予備校だよね？」

あ。……そっか、叶中は午前で終わるの知ってたっけ、あちらさん。今日から僕、受験生じゃないか。今気づいたよ。

となると、もうこいつがなんでそんな格好で動けるのか、とか、本来僕がこの場ですべき質問云々言えなくなつてきちゃったじゃないか。ツツコミしてる場合じゃなかった。予備校遠いんだった。

慌てて部屋へ戻ろうとして、くるおとスキンシップをとる真冬に声をかける。

「僕もう出るから、誰もか思う質問ぶつけておくんだぞ」

「そんなのわかってるって」

「というか、宿題やった？ 真冬の言葉から悪魔の単語が飛び出す。」

「……する概念すらないね」

宿題は僕にとっての悪魔です。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1001ba/>

---

言霊スカイライン（仮んこ）

2012年1月2日09時47分発行